

## 随 筆

### 繰り返される「姓」差別：五十音順弱者の悲哀

山田 哲也

日本人の集団においては、名簿を作成する場合にはほぼ100%、姓名の五十音順で並べられていると思います。この名簿順が毎日の生活に否応なしに大きな影響を及ぼすのは主に学生時代でしょう。青山、伊藤、加藤などのア行、カ行の姓の人は、幼稚園に始まり、小学校、中学、高校、大学と常に若い出席番号をもらっていると思いますが、一方、ヤ行、ラ行、ワ行などの姓である山田、吉本、渡辺などはいつもビリから数人になってしまいます。いわば五十音順弱者です。私は生まれてからずっと山田ですので、いつもビリあるいはビリ2くらいの番号でした。それで何か得をした記憶は一度も無く、損をした記憶ばかりです。例えば、学校のクラスで何か配布物がある場合に、枚数が人数分に足りない場合がよくありますよね。（そもそもちゃんと正しい枚数を数えて持ってきてくださいよ）なのですが、そんなときはいつも貰えない数人になってしまいます。予防接種で行列をつくって並ぶときも、上半身裸にされたまま延々と立って並んでいなければなりません。便宜的に五十音順に番号をつけて並べているだけで、誰に悪気があるわけではないのですが、いつもいつも割り食うことに、ぶつけ場所の無い怒りを感じたものです。

最悪だったのは忘れもしません。中学一年生のときの技術家庭の授業。男女共学ですが当時は男子は技術、女子は家庭科とその時間だけは分かれて授業を受けていました。1年C組とD組がペアになり、技術はC組の教室で、家庭科はD組の教室で行われました。つまりC組とD組の男子は技術の時間だけはC組に集まって授業を受けるわけです。男子と女子の人数が同じならよかったです。そのときは男子が数人多かったので問題が起きました。4月の最初の技術の時間。D組所属の私はC組の教室に移動しました。例によってC組の一番からから五十音順に机が割り当てられ、D組男子の五十音順でビリから3人があぶれることになりました。山口、山田、和田の三人です。Sという技術担当の教師がやってきて授業が始まりました。3人は「先生、机が足りません。」と環境の不備を訴えました。すると教師Sは茶化したような物言いで「先生一、机がたりましえーん、だと？ 足りないなら自分で持って

来い！」と逆に叱られる始末。悪いことにC組の教室は二階、D組の教室は一階だったので、3人は一階に駆け下り、女子の家庭科が行われているD組教室の余っている机と椅子を必死で二階まで運び上げてやっと授業を受けることができたのです。そういうことがその日一日だけならば我慢もできます。損な役回りは毎回順番に持ち回りにすべきです。しかし授業ごとの机運びは、一年を通じて山口、山田、和田の3人に課せられました。この時ほど五十音順を憎んだことはありません。

さて、時は下り私も結婚し子供が学校に行くようになりました。子供の姓も山田です。その学校は当初は進んだ考えを持っており、名簿は姓ではなく下の名前を男女混合にして五十音順に並べていました。子供は初めて若い番号をもらい大変喜んでいました。姓差別だけでなく性差別をも解消した画期的な方法です。積年の恨みを晴らし、すばらしい時代が来ることを予感させる出来事でした。しかし教師にとってはわかりづらいと不評だったらしく、1年だけで一方的に旧来の五十音順に戻ってしまい、時代に逆行する方針転換に親子ともども大いのがっかりしました。また、子供の授業参観に行った時の事です。たまたま私の子供のクラスは理科の実験を行う授業でした。理科室の机は4人ずつの実験テーブルで、旧来通り黒板に向かって左前のテーブルから姓の五十音順に4人ずつが着座するスタイルで、私の子供は案の定、最後尾の右端のテーブルでした。しかも人数に端数がでて3人です。さらに悪いことは重なるもので、そのほかのテーブルには実験器具や試料が準備されていたのですが、3人のテーブルの上には何も準備されていません。そんな状況で授業が始まりました。この状況で子供たちはどうするのか、親が声を上げるのも大人げ無いので見守るしかありません。教師は黒板の前で実験の手順を説明し、生徒は実験器具などをそれぞれ確認しながら、手順を理解しているようです。教師の「さあ、始めてください。」の声とともに実験が開始されたのですが、取り残された3人の生徒は、その段階で教師のもとに駆け寄り、実験器具が準備されていないことを訴えたのでした。教師は「あらあら」という表情で実験助手の人とともに、器具をそろえてくれましたが、実験開始はかなり遅れました。短い授業時間で実験を終了し考察するのはただでさえギリギリと思われるなかで、3人は開始時間の遅れを取り戻すことはできず実験は完了せず、授業の内容を理解できたとはとても思われない状況で、終了のチャイムが鳴ったのでした。授業参観日という教師としてはそれなりに緊張して望んでいるはずの授業でこの有様ですので、普段の学校生活の中での不手際はおして知るべしでしょう。この事例も、（そもそもちゃんと正しい人数分を準備しておいてくださいよ）なのですが、

その被害を被ったのは50音順弱者の3人だったのです。自分だけではなく子供までもが自分と同じ目にあっていること目の当たりにして、胸が締め付けられる思いでした。

今後も世代を超えて、五十音順弱者の悲劇は続くのでしょうか。一つ一つの事例はとるに足りないことと思われるかもしれませんが、不自由の多い学校生活において特定の者だけに繰り返し浴びせられる不条理の数々。五十音順弱者の心の底に積もり積もった鬱憤は、私のように50歳を過ぎた今でも消えることはありません。健康文化の読者のなかには教職についておられる方々もいらっしゃるかと思いますが、こんな風に思っている学生もいるのだということを、心の片隅に置いていただけると嬉しく思います。

(ユーモアのある「五十音順あるある」の文章を書くつもりでしたが、書いているうちにいろいろと思い出したら腹が立ってきて、このような駄文になってしまいましたことをお詫び申し上げます。なお、文中に登場する種々の苗字は、山田以外は単に例として挙げただけであることを付け加えておきます。)

(名古屋第一赤十字病院放射線治療科部長)

